

研究所報

No. 5

発行所

社 高 神

平田篤胤佐藤信淵研究所

秋田市千秋公園1-16

電話 0188-32-4496

「草木撰種録」をめぐる

佐藤信淵と宮負定雄の草木雌雄説

一、序

私的理解においては、混沌とした自然現象を一定の基準を設けて考える必要があったとみている。近世においては特に自然観察にもとづいて、それらを体系的に意義づける道理として広く衆庶農民に滲透していったと思えるのである。例えば天地、昼夜、夏冬から禍福、表裏、陰陽、男女まで様々に二元論的説明によりある程度まではその性質を理解することが可能で、且つ単純明解さもある。飯沼二郎は農民の間ではそこに中国古代の自然哲学による陰陽説が道理として理解され、それが農書に強調されるにいたったものと指摘している。茲に問題とするところは、そうした影響により発展したともされる「草木」（農作物含）の雌雄説をめぐる平田派国学の二者の思想を考察することにある。「物質」と「精神」もその二元論で説かれてきたものであるが、精神なり思想なりを草木雌雄説を通して見ることにある。飯沼が述べているように陰陽説で片付けられるものであるのか。はたして何故に二者は雌雄説に注目したのであろうか。国学精神のうえでは雌雄説はどう理解されたのか。茲に気吹舎門である宮負定雄の著した「草木撰種録男女之図」をめぐる、同じく佐藤信淵の牡牝説をあわせてそれら全体について若干の考察をする。

目次

「草木撰種録」をめぐる——佐藤信淵と宮負定雄の草木雌雄説——齊藤 壽胤	1
九十九里浜の佐藤信淵（一）——伊藤きよ子／中村城／中村英家子	13
佐藤家地位の追善供養について	9
佐藤信淵と中山真際——ある町奉行与力の覚醒	15
佐藤信淵翁の実蹟	18
研究所記事	15
上田 太郎	13
平沢四子男	9

ものである。

両気吹舎門人といっても、元来は佐藤信淵が農政学者として、宮負定雄は農民として生きてきたという立場の大きな差違はあるが、はたせるかな、両者の国学思想の理解から見い出せるものがあるとするならば、それらは十分に注目してよいものであると考えるからである。

二、草莽の国学者宮負定雄

気吹舎門人には農民層も多数みられる。農民の多くは名主や長百姓などが主であったがそうした地域農民の指導的立場に立っている人々の入門により、一般農民に与えた影響には甚大なものがあることは言うまでもない。国学の庶民的普及にはこうした陰の力があった。国学運動の展開と同時代的考慮をしても、幕末から明治初期にかけて草莽たる民の平田国学へかり立てたものがある。そして入門者ばかりではなく平田国学を精神的支柱として明治維新を迎えた人々も少なくない。斯様な情勢の中で一村の長たる人物、あるいは有力者が仏教宗門から神道宗門、即ち神祇祭に宗旨替えをしたことなど、地方においては大きな変革をもたらした。平田門人等の有形無形の活躍は一村全てを改宗せしめるといえる展開を果したところもあり、波及的に全国へ大きな足跡を遺したといえる。宮負定雄は伊東多三郎や芳賀登等によって「草莽の国学者」として注目されてきた。定雄のその著述「民家要術」によると、自らを「口には立派な事をいひつつ。身に其行はなく。己が非をばさし置て他の非分を掘出す。之を芋掘名主というなり。」と、卑下しながらも名実ともに下総国香取郡松沢村の名主をつとめている。彼は名主の名に負う役むきに不足として退役を早々にしている。境涯からすれば定雄は少なくともこ

のような名主としての職務と現状の農村の生き方、また自らの理想とは可成り開きがあることを覚り、結果的に現実をみつめた農村平民における国学の道をとったと思われる人物である。

宮負定雄の生涯については、川名登の研究に詳しい。³ それによれば宮負の出身は紀州熊野で神主宇井氏とともに神の宮を負ってこの地に定着したと伝えられ、定雄の頃は純粋地主手作経営であったという。また名主役も定雄の後を源蔵が勤めるが、代々世襲するような家柄でもなかったらしい。本来近世村落が完結性を求めるものに対して、村外からの入作者が増加した時期でもあったというから、当然に村落の変質があったのだろう。この境遇は定雄にも大きく影響しているとみられる。農村の現実が頽廃をたどろうとするものを、農村生活を根元的思想から建直しを考へて、その理想を国学の徒として宣揚に努めていったのである。それらは彼の著述に表わされているもので十分知り得る。伊東多三郎もまた定雄をはやくに注目して「国学精神の庶民的展開」という結論を与えているぐらゐである。

定雄の生涯や国学者としての活躍や著作についての詳細は伊東、川名両論文に明らかにされ、それに負うところが多いが、繰り返すまでもなく、定雄の名主たる境遇は平田古道学の門人となるに到り、該村周辺地域の農民へ及ぼした影響ははかり知れないであろう。

下総は国学に早くから目覚めた地域でもある。地域性、歴史性などによりそこに特異な国学が発達したことを思わせるに足るところの、下総国学の名がある。その受容と発達には時代を見えた国学思想をもって変革を推進しようとした人物があり、社会的基盤を鄉村社会に根ざしていたという、二つの事実が展開されたところでもある。定雄の生れ育った松沢村もこのような社会的環境を懐としてゐる。定雄の父、定賢は文政二年に駕籠に入門しているが、それ以前から賀茂貞淵等の国学関係者の著作を書写するなど、相当に国学への興味をもっていたらしい。そして定雄は父の後を継ぎ、七年後には自ら江戸に出て駕籠門をたたき、入門誓詞をささげた。その後、定雄の紹介により一人もの人物が気吹舎門人となったのである。定雄が名主としても、また地方国学者として指

導的存在となるのは、やはりこの入門が大きな契機となっており、定雄の門人は一四名となる。⁶ これが定雄の実力ばかりとはいえず、父定賢の影響や下総国学を生み出した風土的環境もある。しかし、定賢との決定的な違いは、定賢が歌を詠み、書を写して最後まで農村の知識人として、所謂歌文派の世界に終止したと思われるのに対し、定雄は書写本中に「医方小兒科秘書」や、自著に「痘瘡疫病除富草考」があるように、医学的に国学性指向を見出したり、「一霊夢記」「幽幻通話」などの著作に現される如く、平田古道学の一つの中心的課題となる幽顯論の影響はまぬがれ得まい。定雄においてはこれら実学的古学派への指向があったとみられる。そこに父子が同じ平田門でも本質的差異が認められると同時に、定雄の自覚と苦悩の結果によるものと考えられる。即ち、定雄の草莽の国学者として生きる立場に到るには、父定賢が名主としてすこぶる忠実な生き方に終始してきたのに対し、名主を辞してから一時は放蕩不愼の酒色に溺れて生業を怠ったという。この放浪は思惑の時期として、大きな意味をもっていたであろうし、それを乗り越えた定雄を我々は草莽の国学者たる名を負わせているのである。

いずれにしても、この放浪期は国学者宮負定雄の位置づけをゆるぎないものにした契機とされるものだが、芋掘名主を自称する時期に稿された「農業要集初編」（文政九年）、「国益本論」（天保三年）を見る限りにおいては、国本の大道を農業において、生産力向上、社会、民主のあり方にも思惑しているから、定雄の思想的中心は農学的国学の思惟の道を時には後退しながらも着実に歩んでいたと考えられる。

さて、文政九年三月の

十八日 下総松沢村宮負佐五兵衛伴佐平 定雄三十歳 米 農業集と云書持参也

十九日 宮負佐平（定雄）来入門也
と「気吹舎日記」にあり、「誓詞帳」には文政九年に

下総国香取郡松沢村
三月十九日

佐五兵衛定賢男 三十歳

宮負佐平 定雄

とあるから正式に駕籠門に入門していることは疑いないものである。

三、宮負定雄の著作と「草木選種録」

文政二年には父の定賢が入門し、この時は同時に下総国から八名の入門者がある程、気吹舎は人氣があった。文政以降は次第に平田古道学が滲透していることも定雄に強い刺激を与えていったであろうことは容易に知れる。定雄は気吹舎入門以来、著述も旺盛に進み、没するまで四二種のを著わしたとみられる。このうち文政十一年には「草木撰種録男女之図」が上梓された。「気吹舎日記」の文政十一年九月には

八日 佐平の草木撰種録彫刻六左衛門方へ頼遺す

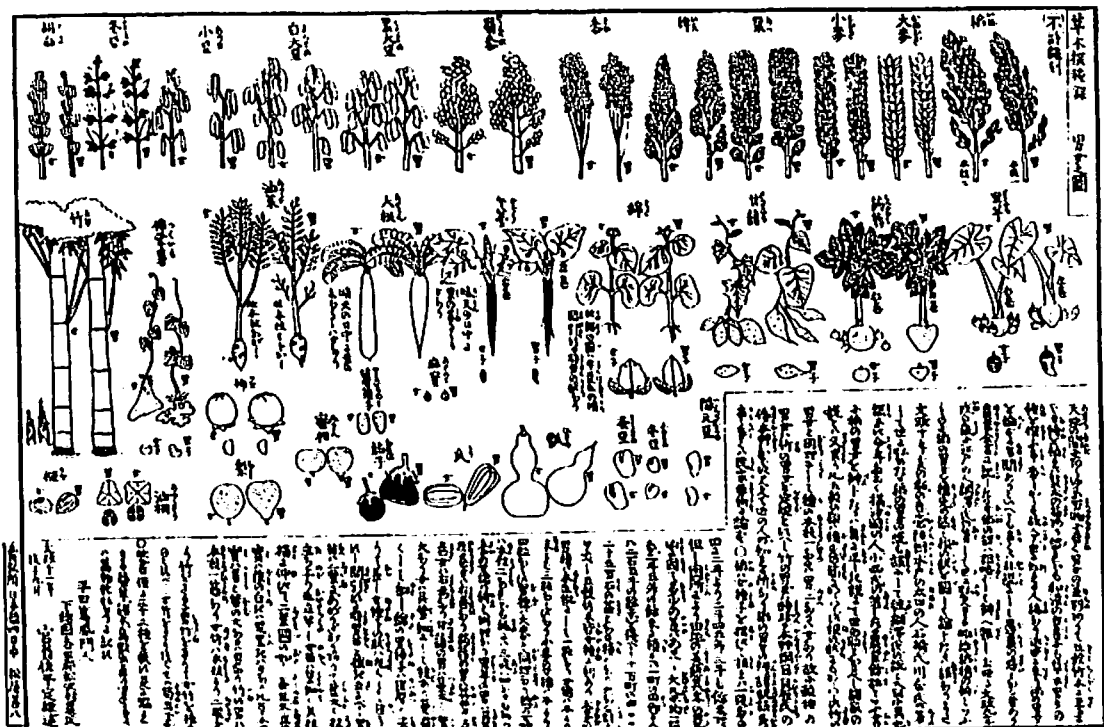
十月十五日には「草木撰種録板木出来」たとあり、これ以来相当普及したもので、同日記によれば、篤胤も度々書状に添えては方々へ遺っている。日記によると講入者も一度に百部とか二百部とか、多数部の注文があり、そのため五回の再摺立があったことが解る。「気吹舎日記」に見える部数の数字を全て合せると一七四六枚となるが、実際はこれ以上に刷ったものであろう。如何に普及したかが知れる。

篤胤の刊本「入学問答」には「門人著書類」が附録せられて、これには

農業要集 附草木撰種録 一卷刻成 宮負定雄

とあり、更に定雄の「民家要術」四巻のほか、小西篤好「農業餘話」、田村吉茂「農業自得」の四著を一括して解題し、「右の書等は各々其業に心を尽して思ひ得たる趣を記して日用に備へ且同志の人々にも示さむと著せし物也」と評価している。定雄の「農業要集」は最初の著述でもあり、文政九年の入門時にたずさえていった稿本として、それに篤胤が序文を認めて板行したものであった。従って文政十一年九月に撰種録が板刻されてからは、「農業要集」の附録ともなり、また単独にも摺刷されたのである。定雄は「気吹舎日記」によれば頻りに篤胤のもとに入りを繰り返し、尚且つ、篤胤もこの撰種録に魅入っていたかが知れるのである。

「草木撰種録男女之図」は稲をはじめ五穀から竹などまで三三種の草木に対して男女（雌雄）の区別をして、その種を撰んで適宜に植えるこ



とによって多産となることを述べるものである。男女雌雄の図を示し、下にその説明文を録した。枚刷である。「草木撰種録」は和漢の古書にさえ草木男女の種を撰ぶことに委しくしたものはないため、今にあっても世に知る人は少ない。近世には幾人かが稲の男女について論じた者もあるが、この多くは非説誤説であり、農民が惑うばかりのものである。

例えは宮崎安貞の「農業全書」の女稲の説は粗略で解り難いし、網沢の「雌雄稲穂の弁」、石橋、川合の説も大同小異の非説であるという。た小西篤好の「農業餘話」だけは真に正しい説を述べている、というものである。小西の著述書は後に定雄とともに篤胤「門人著書類」同列にあるものだが、それはともかく、竹の男女を原則としているという点において、これが即ち明の李時珍の「本草綱目」や、貝原益軒の「倭本草」などにある竹の雌雄説を根本として発していることが正しい説となると述べるものである。

この「草木撰種録男女之図」は僅か三種を載せるにすぎないため、一足に漏れたる葉草、諸木、鳥獸、虫魚の男女の委くハ萬物牝牡考に記す」とある。現在「萬物牝牡考」に被見されないが、草稿とみられるものは現存している。これは、万物の牝牡について発展的に述べているもので明らかに定雄の著述とみえる。

草木の雌雄説について関心を懷いて「草木撰種録」を何故に物したか、その動機についてもはっきりとしたことは解らない。しかし、「草木撰種録」より二年前に書かれた「農業要集初編全」には、宮崎安貞「農業全書」に漏れたる事柄、また、彼の説と異なるものを載せたとして、これは「己年来種芸を勤めて自得したる事」から著わしたといっているから、その頃から意識していたらしいことを露呈している。これには時種から芽出しなど施肥、手入を主に述べるもので、まさに「種芸」の實際にあたり、種に関することは詳しくしている。恐らく「農業要集」が定雄の著述活動の嚆矢とみなすことができるからには、この時点で既に考案されていたのであろう。以来、天保二年の「民家要術」では、「草木と撰種録」を何人かが撰者の名も記さずに世に翻刻をしている者がある、と批判しながら、その効用を詳しく論じている。さらに天保三年の

「陰陽神石図」や、天保己亥初秋（天保十年）とある「蔵六石」にいたってもまた、雌雄の亀状石を発見したことを慶び、これを板木に起すなど、すこぶる雌雄説は後々まで固執したと考えられる。

総体的にこれらを見るにつけ、定雄の草木男女所謂雌雄説について強い関心とそれに対する意味付けに、重大な思惟をもっていたと考えられるのである。その中においてここに述べる「草木撰種録」の果たした役割は平田古道学にも根深いところで絡み合い、定雄の国学思想と密接な関わりをもち、且つ雌雄、男女という謂はば二元論を基礎として、天地開闢神話の神道思想にゆきあたることになる。実は「草木撰種録」の思想は、それを端的に表出させるものであったと考えられるのである。

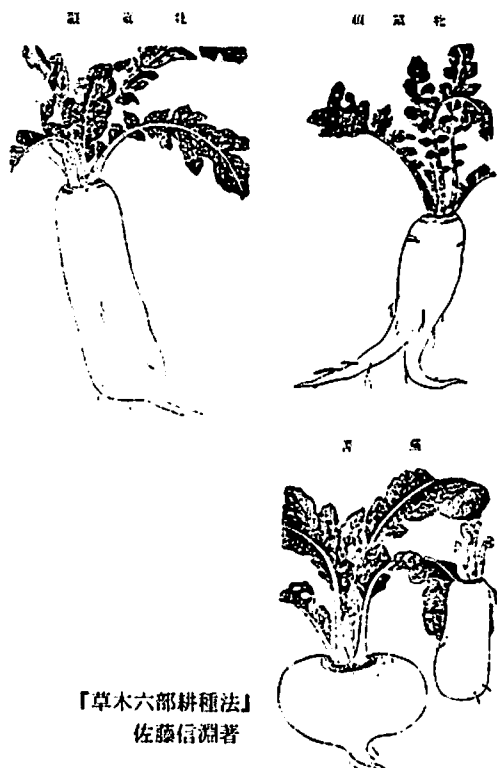
四、佐藤信淵の牝牡観

宮崎定雄が「草木撰種録」を著わした頃、盛んに稲など種子に対する雌雄の選別を述べるものがあつた。「民家要術」に記されるものをみて、宮崎安貞「農業全書」、利川教豊「農隙餘談」、児島如水「農家業事」、皆川蔵人長善の稲の雌雄図、網沢某「雌雄稲穂の弁」、跡部新八「学稼新書」など、「草木撰種録」にみえるものを加えても相当数のほる。多数の人々がこれに関心を寄せて、何如に草木の男女別の問題が農民にとって大事なことであったかの状況を窺うことができる。しかしながら、定雄の態度と思想からはこれらを全て一纏めとして、単なる農学書乃至農事普及とみるわけにはいくまい。定雄は恐らく農書として述したのでなく、国学を根幹として、それを農書農学を通して衆庶にもっとも身近なところで展開させたと考えられるのである。定雄の態度は農民出身であるからして、真面目に勸農の経営、作物栽培の実施にあたる方途、技術的要素を国学思想上に展開させたのであり、その一環として生み出されたのが雌雄説であつた。確かに農書と考えれば、採種法、撰種法は当時の農学知識として重要なものであつたから、当然といえは当り前のことである。だが、定雄の著述からみた思想はそれに終始しているものではないことを代弁するに足りる。そのことにおいても、佗し農書等の雌雄説にあたる厳しい批判となつたのだらうと考えられるので

ある。

一方、同時代における佐藤信淵もまた雌雄説に対して、農業知識や農学を越えた思考を示している。信淵には定雄のようにまとめて単独に雌雄説を述べたものはないが、『草木六部耕種法』（天保三年・二十巻）に言及したものがあつた。同書には「葉と花を需る者は草木共に牡種を選て植ゆべし。牡種を作りたるは、生氣柔弱にして十分に繁榮すること能はず。唯実を採るべき者と児を採るべき者との二種は、牝を撿びて植ること有り。故に諸物耕種法の各條下に、其の物牝牡の図を記して以て撰分るに便す」と述べる如く、諸所に植物の野菜の牝牡を图示して解説を加えている。信淵の雌雄説に対しての基本的な理解はどうかというと、同じく『草木六部耕種法』巻一の五に

先づ日輪は草木の父なり、大地は草木の母なり、日輪照射する所の炎氣は即ち父の精と同じく、又地上播散する所の種子は即ち母の卵に同じ、大地に草木の種子ありとも、日輪照射の炎氣を得ざれば、其の芽を發生すること能はざるは、猶ほ母の腹内に卵あれども、父の発射する所の精液を得ざれば、其の子の化生すること能はざるが



『草木六部耕種法』
佐藤信淵著

如し、故に草木化育の理は全く活物の胚胎に同じ、凡そ其の父精神強盛にして、母の血液調和する者は、胚胎する毎に壯健なる児を産み、父の精神微弱にして、母の血液敗壞する者は、胚胎する毎に虚弱なる児を生む、草木の発育するも此と異なること有ること無しと述べている。『經濟要略』には

抑モ皇祖高皇產靈大神此天地ヲ鑄造シテ万物ヲ發育シ、世界ヲ富豊スル所以ハ、總是レ國君ヲシテ蒼生ヲ撫育シ、兒孫ヲ繁衍セシメンコトヲ欲シテナリ。故ニ八百萬ノ神等ニ命ジ、職ヲ分テ群品ヲ化育セシム。

というように、勿論「郡品」とは草木、禽獸をはじめあらゆるものを指している。万物の化育（生育）は天地の理にして、産靈神による靈妙な力によるものであつて、その根元の理は人智では為すべきことができないのである。「天柱記」によると「産靈神」の概念は「其ノ徳万物ヲ産育スルノ靈妙ナル」もので、「天地生生ノ理」とする。即ち生産力の根元となるものの「神機」によるといふのである。さらに信淵は「凡そ万物の化育することは悉皆剛柔二端を以て土と水とを妙合せしむるの神機より出づ」として陰陽二元論にもとづく生長の原理に従うものかみえ、それを雌雄説として成立させているかに思えるのである。しかしそれ以上に重大な意味づけがなされるのは信淵が広汎な知識と大系的論理に加えて、平田派国学であることを考慮しなければならない。

佐藤信淵は文化十二年（一八一五）に氣吹舎篤胤に入門しているから、定雄より相当に早い。先の「伊吹能舎先生著撰書目」につづいての「門人著書類」には、定雄等の著述のほかに、「天柱記」「鑄造化育論」「實武一家言」「農政本論」をあげている。信淵が家学を大成できたのは篤胤に入門し、その国学により神道哲理を根底に据えることによって成し得たといっているから、同門の影響は実に大であったといわざるを得ないし、それが氣吹舎門でも認めての「門人著書類」の記述だろう。

前章の如く同時代における多数の農書が雌雄説に言及しているにあたり、信淵の説はまた一種趣きが異なる。確かに当時としては選種法、採種法は農業知識として重要なものであつたに違いないし、それ以上に、

これを無視したり否定することは農学者を名乗るに足らないとさえいわれるほど普及し、信じられていたのである。かくて雌雄説は陰陽思想と相俟って、擬人的に男女とみたりして我国に深く浸透していったのである。しかしながら、信淵の草木雌雄説をみる限りにおいては「天柱記」「経済要略」など諸所に根本としての産靈神、造化神の思想からなる万物の生成をいうからに、雌雄もまた皇祖・皇妣としての男神・女神から発しているものとみているのである。この点では定雄の根元的理解の上では同様と考えられる。要するにその強い敬神思想と神道理解なしには雌雄説が成り立たず、単なる陰陽思想でかたづけられないものが存している。

ところで信淵は定雄の「草木撰種録」について「草木六部耕種法」の中で次のように述べている。

草木の牝牡を撰ことは有用頗る多きを以て、農業全書を始として種々に説者多けれども、其理を得たる者あること鮮し、唯だ下総の国松沢村の百姓佐平と云ふ者の説のみ頗る其理を得たるが如し、所謂彼の佐平は自己の才発にて草木牝牡を弁じ得て、草木撰種録と云ふ一枚摺の図説を著し、穀物を始め草木の牝牡を弁ぜり、然れども彼は土民の事なれば、天地の化育を賛くべきの大道を学たるにも有まじければ、農政の蘊奥に達したるにも非ず、況や万物化育の神理に於てをや、故に彼一枚摺に載する所の説に頗る取るべき事あれども、彼が説きたる書の如く、諸作物牝種のみを蒔て牝苗のみを植るときは、其性の柔弱なるが爲に、旱魃にも風雨にも傷易を奈ともすること無し、故に作物万全を得んことを欲せば、我家の農法に如くこと無し

ここにおける定雄の説に対しては一定評価をしながらも、男の強さを強調する点では相方に大きな喰い違いが生じている。そして「彼の一枚摺に平田門人と標せり、所謂の平田と何人の事なるぞ、予が郷人に平田大角なる者ありて、頗る書を読んで且つ国学者の名あり、若し彼の大角が門人ならば斯る疎放はあるまじきことなり、然れば其平田と称せし彼が師父は何れの者なるにや」と述べ、同門であるならば論説の差異はあ

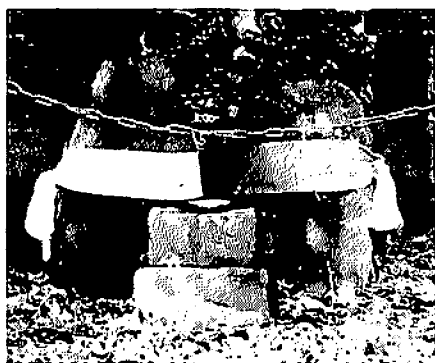
り得ないものと厳しく批判をするものである。今日における発達した生物学的知識からすれば、簡単にそれら雌雄説は俗説にして、謬見であることは言をまたない。しかしである。蘭学を修め、植物の形態知識についても豊富であった菅の信淵が雌雄説に対して強弁な論を張ったのは、やはり国学的農学にあったからと考えられないだろうか。何故ならば、信淵の農学思想の理論大系のもとに構築された学理の上に立脚して表出した一つが、この雌雄説であろうからで、即ち「草木六部耕種法」という書物が単独で成立しているものではなく、「農政本論」を綱領とする「農政七部書」による体系的論法から述べられるものだからである。その上では定雄の農書も含めて、他農学者による単に栽培技術、農事に終始されるものとは自から差異のみられるのも当然といえるだろう。

ただ、「凡そ天地間万物牝牡あることを審に弁ずるときは、男には必ず陽物ありて、女には必ず陰処あるべきは定れる理にて、既に陰処あれば、其の女たることは論ずるにも及ばず」（「草木六部耕種法」巻一）という「理」においては、農業経営を施策とする為政者にも理解させんがために、その根本を雌雄説をとったりしながら強調するところにあった。信淵のこのような立場での意識には、国家経営的理論のもとで述べた「耕種法」にみえる斯様な草木の雌雄説が、単なる無定見な雌雄説を披歴したものではないと考えられる。このような見方から、草木雌雄説は平田派国学の両者のとった道は単なる農学説とみるわけにはいかないものが存するのである。

五、草木雌雄の思想と平田国学

宮負定雄の雌雄説が「草木」に限らず、可成発展していることは、「蔵六石」という亀形の奇石にも雌雄を発見してこれを強調し、さらには宮負の出自と関わる松沢村鎮守の熊野神社の境内に安置されている「女男石」も定雄が関わったらしく、これらにしても如何に雌雄説に興味と普及をなしたかが伺い知れるであろう。佐藤信淵の「草木六部耕種法」は天保三年に成立しているから、定雄の「草木撰種録」のやや後年である。

このさらに後には、「萬物牝牡考」を發展させた安政四年の「天地開闢生植一理考」という著述に到達する。この間定雄は国学者として着実な歩みをみせ、平田学の思想経歴をたどっている。



熊野神社境内の女男石

信淵もまた、神道理論に裏づけされた著述をつづけるもので、信淵においては国と使命観と産靈の神教観が思想の核心として、遂に国学的農業思想を構築していく。信淵のこうした思想は「天地銘造化育論」「天柱記」に示されており、「経済要略」と関連性をもつ体系理論でもあるが、国学で論じられる「修理

固成「生成発展」と国土経緯（国土経営）、開物（物産産業開発）とは完全に適合融和してくるものである。だから農本思想と国学思想は相反するものではなかったといえるのである。

定雄が「民家要術」の巻頭に「祭祀」をあげ、「農業要集」自序には敬神の徒たる観を示すように、神伝による五穀起源説から始めて農業種芸の道も神代から始まるという。「現御神の御民と生れ出て、種物を飽まで食へ暖に着て。物思ひ無く齢を延るは。甚も目出度事なりける。斯るやごときなき恩頼を蒙る辱さに。己をぢなき身にしあれど。祖々の業に継て。向股に泥掻よせ。手肘に水珠かき垂り。田かえし草ぎり。奥津御年ち歳々にいそしみ作りて貢まつり」と述べる程度なのである。

このように信淵、定雄両者にあつては農学の思想的根拠に国学の精神を、より密接にしたものであった。天地自然を相手とした農耕生活上、天地を父母として草木、ひいては万物が生熟するという考え方は、その恵みたる神靈の為す業によつて極めて左右されるものであり、それが農業の性格、農村の生活とともにある由縁と看取する精神性は国学思想と合致するのは、むしろ当然といわねばならない。農民の信仰が敬神の念を

雄龜

長 四寸五分
平 三寸六分
厚 二寸四分
重 三百六十日



雌龜

長 四寸
平 三寸二分
厚 二寸二分
重 二百七十日



正月廿日所産因多取
尻項龜腹下下坊
問也

二月甲子日所産因多取
大國龜北總領子中
中也

此二石近頃所産以較較也予自春歲故傷不償耽偶
彼二畝不考太甚願散財置龜幸立今年始續採山海經
神傳錄曰建業有庫子姓邢家貧發錢滿二千輒病或失
本其妻竊聚錢埋地中一夕忽聞有聲始掘自地出等
窺戶而本有瑞璧堅地者明日視之皆錢其妻乃告埋產
之處發視皆亡矣邢後得一自然石龜其狀如真置庭中
石樹樹下或見之曰此寶物也因收置庭中自爾積充足
後頗富矣史記龜策傳所謂能得名龜者財物歸之矣
大富千萬宜故邢氏之富因是乎又更以此二石收置庭
中以爲諸寶以爲諸龜以爲其寶蓋天之所寶其寶之
中於具形則寶龜之藏六廟而如又更字龜龜更因此寶
龜之靈驗而欲觀其爲年之計龜龜當十定季之邢氏
也今書其圖說以贈同好之人以公祝歌雅歌昔昔再拜

天保己亥初秋

下總國赤松郡

齊組舎主人

漸養することにより、作物を豊かに、生活を安定せしむるものであり、農耕者自ら体得実感していたからこそ、生活態度として国学的精神が信条としても理解できるものであったに違いない。そこに「草木雌雄説は有功に働いたと思えるのである。

このように見てきた場合、信淵及び定雄にあっては雌雄説が単なる農業知識以上のものであったという結論に達する。また、当時の草木雌雄説が、確かに一般的にみて陰陽思想の影響は否めないが、本稿に述べる両者にあつてはそれ以上に、平田国学の思想的理論が成し得たもの、乃至ひかえめに言えば、助長したのである。我國の固有の神道に純潔なる信仰を漸養しなければ、その生活も腐敗堕落の一途をたどるだろうとする理念があつたのだらう。定雄の著「貧富正論」「国益本論」はそれらを雄弁に語り、信淵は「凡そ人民の農業を勤めて萬物を豊饒にするには天地化育を賛る所以なり」「農業に精細究め萬物を豊饒し人民を安集して此を播恩せしむる時は、即天意を奉るなり」（「培養秘録」）という如く、「六部耕種法」にまで及んでいけば、その思想の裏には事大的に国学思想の宣揚にあつたといえまいか。

換言すれば、それらは国学思想上において、雌雄説の論駁正否は別としても、意識してこれらに言及したといえるのである。定雄の草木雌雄説を高く評価し、且つ気吹舎蔵版としても篤胤が板行し頒布せしめた意義も充分理解できよう。然も信淵の農学の思想的根柢として国学精神が根底理論となつて展開されていったことをみるならば、草木雌雄説の普及は大きな効果を生んだといえよう。

註

- ・1. 飯沼一郎稿「農書と陰陽説」（『講座日本の思想2・知性』所収・昭58・東京大学出版会）
- ・2. 拙稿「秋田県内の神葬祭——北秋田地方」（昭61・秋田県神道青年協議会）に事例及び小論を載せてある。「一村の長が明治初期に平田承国学に傾倒して、村民全てが改宗したという例がある。
- ・3. 川名登稿「草莽の国学者宮負定雄について——著作から見た生涯」（昭47・千葉経済短期大学『商経論集第四号』所収）に、松沢村における宮負家の位置づけ、

名主職を勤めた父、著作を中心とした定雄の生涯。著作目録などはほぼ全貌が明らかにされている。本稿もこれに負うところが多い。

- ・4. 伊東多三郎著「草莽の国学（増補版）」（昭57・名著出版）に所収の「下総の平堀名主」として宮負定雄を詳しく論じている。川名論文とともに啓発されるところが多い。

- ・5. 渡辺金造著「平田篤胤研究」（昭17・六甲書房）所収「気吹舎日記」には、文政九年三月十八日初めて訪れて、翌日再び篤胤のもとに来て入門の許を得たことが明記されている。

- ・6. 「下総国学史料」（『旭市史第二巻』）所収。昭48・旭市役所・同郷さん委員会）によれば、宮負定雄の門人は文政十年（天保九年）まで、松沢・万歳・新里・端木・相谷・篠里から一四名が入門している。

- ・7. 伊東多三郎稿「下総の平堀名主」の中で、下総佐原伊能頼則の随筆「己未雄録」に「宮負定雄の事」という記事があることを発見して述べている。これに詳しいが、川名登も「蔵六石」に定雄自らの文を指題して「このような彼の行動の陰には深い思想的苦悩があつたのではなからうか」と結んでいる。

- ・8. （・5.に同じ）渡辺金造著「平田篤胤の研究」所収。

- ・9. 川名登・3.に同じ。定雄の著作目録が載せられている。筆者も調査をしたが、このうち半数以上は現存しないためにどのような内容であるか不明な点の著述も多いが、定雄の書いた「目録」が現存する。

- ・10. 田中耕司稿「学者の農書「草木六部耕種法」」（『近世農書に学ぶ』（昭51・日本放送出版協会）所収。

- ・11. 豊政七郎著「国土経緯論」「氣候実験録」「土性并」「振防海論志」「培養秘録」「和蘭秘要」「草木六部耕種法」を指し、これは「復古法問答書」中にみえている。全て大系的に考えていた。

- ・12. 天保三年の「陰陽神石図」の著述に詳しい。

- ・13. 拙稿「平田篤胤の農学思想」（『研究所報第三号』昭63・平田篤胤佐藤信淵研究所）

九十九里浜の佐藤信淵(二)

房総九十九里の漁村と信淵

伊藤 きよ子



昇享北寿筆 上総九十九里 地引網の図
(東京国立博物館蔵 掲載許可済)

絵が好きなのだから錦絵などもよく目につく、昇享北寿筆の「上総九十九里地引網の図」をみたのは、上野の博物館でだったでしょう。か、洋画風のいい絵でした。

川越先生とお茶をいただきながら、その話をした時、ちょうど同時代の九十九里の漁場を、実際に

視察されて、漁村の経営法を著されたのが信淵先生だときかされました。

その後、内閣文庫で、その自筆本「漁村維持法」を調査される先生についていって、その本を初めて見る事ができましたが、信淵先生は昔の人であるにもかかわらず、

一字一字を大きな楷書ではっきり書いてくれており、ふりがなまでつけてくれていたので、たやすく読めました。が、北寿の絵に描かれている地引のようすが、いかにも目に見えるように活写されていました。

それによると、九十九里の網元は大い豪家で、本宅は海岸から相当に内陸にあって、漁期になると主人は浜の上納屋へきており、昼は客人も多く、閑日にはよく酒もりをしていたとありました。

粟生村総兵衛網元の上納

屋は、八畳の座敷があつて天井もはり床も欄も椽もあり、下座敷は十二畳程で、ここで料理人や下男給仕の子などが居ったとあります。下納屋は間口十三間、奥行四間で、上納屋に近い方五間は板敷、他は土間、ここで飯汁をかしぎ、大釜が三つあつて魚油をしぼるのに使っているとも書いていました。

ふだんは漁士数人が網の手人などして待機して居り、見張りが、沖にかもめが群がり海水が紫色にみえると、スピーカー役の音人(おとんど)が、おゝゝゝと声長に数十度叫ぶとあり、この音人は平漁士の二人分の給料をもらうそうです。村々に散住してふだんは農耕をしている漁士たちが、一せいに浜へ馳せ集り、用意してある二船にとび乗る。ボスの置師(おきあい)、この人は三人分の給料だが、右側の船へ乗り込み、植拍子勇しく沖へ漕出し、二船を一所に寄せ、網をおろし、左右へ別れて岸へ向う。係りが岸近くで海へ飛込み網の尻についている大袋の網の口をしめる、OKと手をあげる。やがて浜へおり、主網へ子網をつけて、えいえいと音頭をそろえて引き上げる。

大漁ときいて近隣村々の老若男

女が手伝いに集まるが、みんな腰にビクを下げて、若干の手間賃代の魚をもらうのだが、雑魚は(いわし以外は皆雑魚)漁士がとなりちらす割に、めすむのを大目にみるのが慣わしで、そこいらの加減のとり方が手伝人の多少にひびく。漁がまだあるとなると浜へ引き上げるなり収穫は他の連中にまかせて、すぐに別の船で沖へ出るという形で、一日に七、八度から十数度も網を引くと書かれていました。

九十九里の漁業はいわしが専門で、食料の外は肥料にして売出したそう、この時代の東海道、関西、四国辺の農産物への施肥に使われたので九十九里は大変経済的に豊かだったように見られました。九十九里の程度の中程の網元では漁士を五十人程もっていたようですが、豊漁期には、浜はお祭のようだが、一旦不漁ともなれば、平素飲ん兵衛の多い漁士たちは、たちまち困窮となり、加えて兎作ともなれば、枕を並べて餓死者が出る例が多く、ここに漁村をもつ藩主たる者は、漁村の経営をよく考えなくてはならぬと説くのが、この本的主旨で、面白いことを書いてありましたので紹介します。この書(漁村維持法)をみて、つばを

はきすてる藩主は、愚主。棚へあげて何もしない藩主は、不肖。よいとわかってもぐずぐず月日を送る藩主は、庸主。諸臣と会議して、奉行を撰任する藩主は、智あるの主。欣戴礼拝し直ちに従事するは賢主。と述べていましたが、初めから終りまで藩主への忠告となっていました。

そして興味深かったのは、漁村の社会福祉制度を強くみており、藩主は「療病館」を建てて、無料で治療をほどこすこと、藩主は「広済館」をたてて、貧困者を救助し、住宅、道路、橋、堤防の建設を引うけ、「開物館」を建てて万民の仕入金を貸し、「製造館」をたてて諸具を作り、「交貨館」を建てて、魚価が豪商に独占されぬように、といって当時としてはあまり考え及ばない進んだ産業の計画をたてて、藩主へ進言しているのには驚きました。当時は漁獲高の四〇パーセント、又は、三〇、二〇、一〇パーセントと土地によって差はあったようだが、上納金を藩に納めていたそうで、処によってまちまちだったとあり、全く上納なしの浜もあったが、信淵先生は二〇パーセントを適当とみていたようでした。

こうした内容がこの本の概要でしたが、これらのことを信淵先生は、九十九里の主な網元を歴訪して情報を得たようで、同書にのせられた五軒の大網元について、次項の方々によって探訪されること

房総九十九里浜の佐藤信淵(二)

網元・粟生村総兵衛と信淵

信季著、信淵校訂になる漁村維持法に、九十九里の漁法が詳説されており、特に粟生の総兵衛をはじめ外四軒の大網元の話が出ています。信季は信淵の父で、安永年中(一七七二—一七八〇)九十九里を遊歴しており、その検分をもとにして書かれたものだろうが、信淵も九十九里にほど近い東金市の大豆谷を、その壮年期のほとんどここを本拠に活躍されており、この漁村維持法の校訂も、当然この目と鼻の先にある九十九里の網元を歴訪してなされたものであろう。当時九十九里の常識では、少なくとも一芸に秀でた文化人にして、九十九里の網元へ顔を出さぬでは一人前に扱われない程網元たちの

になるのだそうです。

(筆者は日本女子大学生の頃の草稿を主婦となって改稿された。その頃藤沢市へ移ったが、その後転住、日下住所未詳)

中村 城

力は大きかった。なぜならば当時



九十九里 いわし網

のこの浜の漁業は、全国的にみて最も盛んで、経済力も大きく、江戸住の文人も一度はここを歴訪しなければ、と言われていた。頼山陽も円山応挙も、それらの一人だった。

信淵の遺跡を訪ねて川越先生が九十九里にみえられたのは、一昨々年(昭和四七年)の田植がすんで間もなくだった。以前から度々手紙で調査を依頼されていたので、おおよそは書き送っていた。

信淵の書き残された五軒の内、現在までそこに家のあるのは、粟生村の総兵衛だけで、他は皆これらの地を去ってしまった。家も勿論なくなってしまった。

粟生(千葉県山武郡九十九里町粟生)は、拙宅から南へ一キロ程で、現主人は飯高賢吉氏で、氏は農業を営み、村長、農業会長など歴任、現在は専ら趣味の盆栽を千数百鉢もおもちで、屋敷の全面が鉢でうずまわっている程、目的が全く営利をはなれており、悠々自てき、気が向けば草をむしり、向かなければ生えるにまかせるといった晴耕雨読の方、元禄頃からの家は、生活の



粟生村総兵衛家（昭44年）

変化につれて、改造され、昔の土蔵も、数箱もの古記録を蔵したま、廃屋寸前となっているのは、時勢の移り変わり、それでも九十九里大網元、四十八ヶ村網元頭の貫禄が、今日まで続いている。アオのソーベ、アオのインキョ、といえ、戦国時代末から三百五十年、九十九里の漁業実権をにぎっていた名家なのである。

九十九里四十八ヶ村の網元頭で、この家の船には、その印として、藩の許可があつて「さげ髪」という船印が船首に立てられていた。さげ髪というのは、棒の先に髪をかざったまといのようなもので、十貫目位あり、この印のある船がくると、アオの船だとか、インキョの船だとか、サゲガミだとかいって恐れていたという。海上警察権が一手に与えられていたからで、当時は裁判もさせられていたように、判決文の記録がたくさんあり、ただ名儀は東金の代官名儀であつた。

この船に乗り組む漁夫は名誉なことで、資格テストは、六尺以上で米二俵をかつげなくてはならなかったという。粟生では昔から人が死んでも墓石は建てられないと言われているが、それはこの水夫連中が、力くらべにその真新しい墓碑をかつぎ出して、遠くへ運んでしまうからだといえられている。

さて、信淵がこの家を訪ねたという直接的証明物件は信淵著書外今のところは無いようだが、江戸や近在に住まれて、家へ来ないといはずがないと賢吉氏も言われていた。

ところが現在、この家歴や、同

家の研究は未だ不十分のようで、歴代もはっきりわからない。いずれ郷土史の立場からもしっかり研究しなければなるまいが。

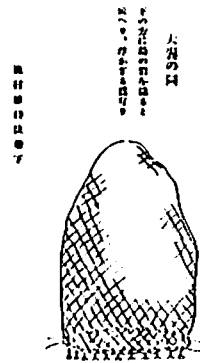
ともかく、当主賢吉氏の父が源吉郎、その前代あたりからさき代々が総兵衛で、その中には、霞丘と号した人も、東沢と号した人もいるが系譜ははっきりしない。過去帳に類する紙に、天保元年六十九才で亡くなられた当主が、粟受院慈徳日満という戒名があり、天保九年に二十五才で死んだ方を、総兵衛尚義の二男とあり、尚義の長男は、文化九年五才でなくなっている。これらを整理してみると、天保九年現在だと、粟受院の総兵衛は他界して八年目、現主人は総兵衛尚義となる。

ところが最近、元禄十六年に大地震があり、津波で死んだ人たちの供養碑が村で発見され、それには、天保十三壬寅二月二十有二日飯高俊謹撰と刻まれていた。すると、さっきの尚義はこの俊にあたり、霞丘と号した人もこの人のようである。

だとすれば、信淵との年令差は約二十才の若手、信淵の東金時代というのは、主として文政年間を中心としているから、粟受院の生

存中であらうし、粟受院総兵衛は信淵より七才年上でなければならぬ。なお信季、来訪当時の飯高総兵衛については、同家の過去帳よう記録では、位はいでもよくわからなかった。いずれは、はっきりする時がくると思うが。

（九十九里町社会教育委員長、郷土史家、千葉県山武郡九十九里町法久住。現在は故人）



「漁村維持法」挿図

房総九十九里浜の佐藤信淵(三)

網元・不動堂村の角兵衛の跡

中 村 美家子 談

(川越云。中村家に泊めていたいた夜、中村城先生の奥さま、といってもおばあさまと呼ばれている方だが、若い頃を思い出されて、不動堂の角兵衛家のお話、それを抄録する。信淵と角兵衛家の直接のつながりは、その話からはわからなかったが、九十九里の網元として漁村維持法に出てくる家であり、歴訪された一家であることはまちがいないと思うし、当時の網元家を理解するためにも、漁村維持法の理解のうえにもと思い一項とする。)

そういう先生とご関係のあったお宅だと知っておれば、もう少し詳しくみておくのだったが、

角兵衛の家をこわす時でしたが、あれは中正の中頃だったかね、大きな家でね、屋敷は一町歩程で、よほど前から空家になっていましたね、いつか中を見せてもらった時です、家に広い土間があって、そこに大きな井戸がありました。

はねつるべが天井に大きく上り下りしていたようでした。部屋づくりは、そうそう、九十九里の作田新田の作田家も大きな網元で、醤油屋もしていた家でしたが、あそここの家が、東京の民家園に売られて、今そこに再築されていると聞いていますが、あそここの家と同じような作りだったと思います。何でも、建具が並はずれて大きくて、二階も高くて、天井板が小さく見える程でした。

らん間の刻りものが大へんこみ入ったもので、解体する時、このらん間だけを買った人があるといっで、大人二人でかついで行くのを見ました。

庫の跡だということに、石の室があった大きな石がふたされていました。

戸障子は全部五尺二枚で、朱塗りのサンが今もあざやかに思い出されます。フスマは羽二重にオナンド色の網代の模様がついていました。この家を買った人は、大網



不動堂村角兵衛跡(昭和44年)現豊海小学校

市の斎藤さんとかいう方だとききましたが、結局あまり大きいのでバラバラにして売ったとかとも聞いています。

その頃娘さんが二人きりで、姉さんが海軍大尉の方をおむこさんに迎えたが、全く生活様式も、職業も変わったので処分したことでしょうが、刀剣だけを残して、話だと長持二杯分の書類を焼いて整理したとききました。

家の四周は堀で、楠や栗、それに松が一ぱいに植っていて、こんもりとした杜にみえたもので、私の家からは旧道にそって南へ一キロ程で粟生の総兵衛の家、それからまた南へ一キロ程でこの不動堂の角兵衛の家がありました。この旧道は、昔は海岸ぞいの道だったそうで、九十九里の海が、すぐそこら辺まできていたらしく、今はもう一面の水田で変わったものですね。

角兵衛の屋敷跡は村で買って、小学校を建てましたが、あの学校は九十九里町豊海小学校といって、たしか平屋の学校だったでなかったかな、何せ広い面積だったからね。ゆっくり建てられたのでした。

井戸は校庭の中になったのでうめてしまったし、まわりの堀も、今は水田となっています。角兵衛の家は佐久間という姓でしたよ。

(川越云、翌日この家の車で、この小学校を訪ねた。平坦な水田地帯にあって、日曜のためひっそりとしていました。帰京後、民家園を訪ね、保存されている作田家を見学しましたが、そのことは「七」に述べられています。次号)

佐藤家霊位の追善供養について

澁谷 鐵五郎

佐藤家のあらまし

佐藤信淵大人の誕生された佐藤家一族の上祖は、佐藤継信二十五代の子孫「佐藤土佐式信」と、佐藤家系図にある。式信以降の佐藤家系については数多くの諸書に掲げられてあり、また拙著「佐藤信淵大人の二人名跡」(彌高叢書第三輯)にも誌してあるので、詳細は避けよう。

佐藤家の世に貢献した数多くの功績は、敢えて掲げるまでもなく周知の事実で、いうまでもなく族望の家である。代を経ること枝胤繁衍し、その家数十指をはるかに凌駕した。

しかし昔から、世の習いを繰り返す栄枯盛衰、新陳交代ともいうべきか、家運は常に安穩とは限らない。佐藤家とて例外でなく「本宗枯れ枝葉繁る」衰退・繁栄をした。では、どのように佐藤家の家運は盛衰したのか。佐藤家系図によって、そのあらましを略記してみよう。

佐藤家は小野寺氏の家臣で、代床舞村(雄勝群羽後町西馬音内床舞)大戸沢の城主であった。慶長六年(一六〇一)八月、二十七日信慶の代に主家小野寺氏は改易となり、信慶は大戸沢に帰農した。翌七年、佐竹氏の国替入国によって信慶は、床舞村の肝煎を仰せ付かった。

三十三代信利は中仙道郷泉沢村(羽後町仙道中仙道泉沢)の村上縫殿之助の弟で、信正の女に入贅した。通称、百祐・基助といい、信邦とも名乗り飲庵と号した。湯沢佐竹家の田地と境界のことで論争し肝煎を免ぜられ、三輪村貝沢(羽後町三輪貝沢)に移り、佐藤元春の門に入って医師となり貝沢で医を開業した。朝鮮人参や、南瓜を植栽したという。佐藤家の真価を世に高めた「医家」の元祖であり、また「家学」の創始者である。

三十四代信栄は、基助・元仙・式行と称し、元庵と号した。由利郡上塩越(象潟町塩越)須田惣左

衛門の弟で、信利の女に入贅した。経済・農政・氣象・治水・殖産など、多岐にわたった学者であった。

三十五代信景は「医家」・「家学」の三代目である。通称基太郎、医名元伯、不昧軒と号した。土壌・鉱山学の先駆者であった。三十六代式正は不昧軒の長男で医号を元仙と称した眼科の名医で、解剖術も心得ていたという。佐藤家の家学四代目は、式正の末弟信季が継承した。

三十七代長栄は式正の三男、長兄の元泰(医号元仙)は西馬音内横町に分家し、次兄の元益は藤堂藩主(三重県)の侍医となった。長栄は晩年、嗣子の元貢が佐竹藩の医師に仕官し久保田城下(秋田市)へ移ることになり、それに従った。長栄の弟武右衛門は、西馬音内前郷に分家した。

三十八代元貢(式如)は、通称英太郎といった。眼科医の聞え高く佐竹藩に召し出され久保田に移り、後に本道(内科)に転じ藩主の侍医となった。藩の典薬、医学頭を兼務した。藩主の参観に随従し、江戸で死去した。

三十九代式禮は元貢の弟で、前名を貞寿と称した。藩主の侍医・本草会頭・医按会頭・医学頭を兼

帯した。廃藩後、植田村(平鹿郡十文字町植田)に移って没した。

佐藤家の家学四代目を継承した信季は、通称庄九郎、孝伯ともいい、玄明窩と号した。

その子が、信淵大人である。

佐藤家の総領筋は何れか

佐藤家三十八代元貢は久保田藩医に仕官し、一家をあげて久保田城下に移った。久保田移住に際し元貢は分家の武右衛門に「先祖以来の墓・家・屋敷」の管理を委任したという。久保田移住二年にして父長栄が久保田に没した。久保田城下「隣勝院」を葬所とした。

元貢は江戸に没し、江戸の総泉寺に葬られた。かくして、五十年の歳月は流れ明治四年の廃藩となる。武家社会は瓦解し、武士たちは失業の身となった。失職した武禮は故郷に帰るべく先祖が武右衛門に管理を委任してあったという家・屋敷・墓地の返還を要求したが、武右衛門は「五十年このかた先祖の墓地に供養もなく、二代の葬所を随所に設け、先祖の墓所に分骨・遺髪なりの埋葬もしない。これは、委任でなく譲渡であろう」と、式禮の返還要求には応じない。筋の通った武右衛門の答弁と、従来の

経過からしても返還はおぼつかなしとみた式禮は、武右衛門との交渉を断念し植田村に移り、明治十七年に没した。葬所のない式禮は、姉の婚家谷地新田村(十文字町睦合谷地新田)佐々木善左衛門の墓所に葬られた。式禮に子なく後継者の宇一郎は、秋田市寺町の龍泉寺に葬られ、子孫は同寺を葬所とした。

かくして佐藤家は、西馬音内のすべてを失い総家筋をも失った。

それとはうらはらに武右衛門家は、祖宗の霊位と併せ墳墓の供養を続けること創家以来百六十余年を経た今日においても欠かすことなく菩提寺の宝泉寺と、連携を密にし祀を怠っていない。また次の印刷物をみるに、武右衛門家をもって佐藤家の総領筋とみなされていたようだ。

業界紙「石油と鉱業」(秋田鉱業時報社発行)は創刊二十年記念号を特集し、記念行事を昭和五年九月秋田市において実施し、その行事を報じた記事の中に「此日佐藤家の総本家を継承せる佐藤信太郎氏列席のため」「云々の記事を掲げてある。信太郎は、武右衛門の子孫。こうした記事からしても当時、武右衛門家をもって佐藤

源義経股肱の臣 佐藤維信二十五代の子孫

② 式 信	土佐 代々床舞村大戸沢城主
妻 天正6 (一五七八) 10・8・2118没	盛林柳定門
妻 天正19 (一五九二) 10・8・2118没	妙林柳定門
③ 式 治	土佐 彌蔵
妻 文政4 (一八九五) 7・3没	関山柳定門
妻 (年月日の記載なし) 妙川柳定門	
④ 信 慶	土佐 新左衛門
妻 慶長18 (一六〇三) 3・9・1213没	音明柳定門
慶長6年(一六〇〇)八月主家小野寺氏改易となり大戸沢に帰す。翌七年(一六〇七)床舞村の肝煎となる。	
⑤ 式 直	土佐 新蔵 信濃の弟養嗣子となる
妻 元和2 (一六二六) 6・7没	蓮池柳定門
妻 寛永2 (一六二五) 2・2没	妙蓮柳定門
⑥ 信 家	土佐 彌内
妻 正保4 (一六四七) 8・7・5没	花岳柳定門
妻 承応2 (一六五三) 8・19没	妙岳柳定門
⑦ 信 定	土佐 彌八
妻 万治元 (一六五八) 6・3・149没	即心柳定門
妻 寛文11 (一六七二) 6・149没	妙法柳定門
⑧ 式 貞	土佐 新三郎
妻 延宝2 (一六八四) 7・20没	白蓮柳定門
妻 天和2 (一六八六) 正・21没	妙蓮柳定門
⑨ 信 直	土佐 基助
貞享2 (一六八五) 11・26没	実相妙容柳定門
(妻の記載見当らず)	
⑩ 信 利	秋庭 信邦 基助 村上禮殿之助入聲
肝煎を免ぜられ三輪村員沢に移り医者となる	
元禄15 (一七〇二) 4・9没	欽安道喜柳定門
⑪ 女 信利妻	元禄3 (一六九〇) 5・26没 福世妙寿柳定門
先祖代々の菩提所床舞村金峯山東向寺を罷り、西馬音内延命山宝泉寺を葬所とした	
⑫ 信 榮	元應 式行 元仙 基助 須田惣左衛門第八入聲
西馬音内前郷に移り住む	
正徳3 (一七二三) 6・5没	元應仙妙柳定門
享保3 (一七一八) 3・18没	善室妙安信女

⑬	信 景	不昧軒 元伯 基太郎 享保11 (一七二六) 7・1829没 妻 享保11 (一七二六) 8・1829没 松山了貞大姉
⑭	仙 庵	分家須田氏を称し代々医家を継承
⑮	式 正	元仙 清雲院 眼科の名医 寛政3 (一七九二) 11・7没 妻 享和元 (一八〇一) 11・11没 清雲妙貞大姉
⑯	信 季	玄明窩 孝伯 庄九郎 天明4 (一七八四) 6・15没 (妻の記載見当らず) 一法了全居士
⑰	信 潤	樹園 松庵 元海 百祐 享和3 (一八〇三) 10・2・6没 妻 文化9 (一八二二) 10・2・6没 進武院建孝得祐居士 源徳院素願自静大姉
⑱	元 泰	元仙、医師、分家す 文政10 (一八二七) 8・8没 元翁寿仙大使
⑲	長 栄	通元 文政7 (一八二四) 9・2818没 妻 寛政7 (一七九五) 9・2818没 浄本院南枝通元清居士 石室妙儀大姉
⑳	式 如	元貞 英吉郎 文久2 (一八六二) 8・1328没 妻 文久元 (一八六二) 正・1328没 誠忠院元慶常貞居士 真心妙操大姉
㉑	式 禮	貞寿 式如の弟 明治17 (一八八四) 5・17没 誠厚院賢能居士
㉒	一代 武右衛門	富家 武吉 西馬音内前郷に分家 天保11 (一八四〇) 12・6没 妻 佐藤氏嘉永6 (一八五三) 6・28没 仁翁良寛居士 仁室孝大姉
㉓	二代 武右衛門	高橋三四郎男入聲 明治4 (一八七二) 2・1没 鶴翁良仙居士
㉔	カツ 武右衛門妻	文久2 (一八六二) 3・20没 西岸貞操大姉
㉕	彦 治	明治5 (一八七二) 12・2715没 妻 明治18 (一八八五) 正・2715没 天眞常光居士 徳隆院孝山貞翁大姉
㉖	四代 武右衛門	英吉 明治43 (一八八五) 2・1122没 榮屋了寿居士 曾門瑞光大姉

家総家と世人はみなしていたようである。

武右衛門家には明治三十一年に書き替えた古色蒼然とした過去帳が伝えられてある。佐藤継信より数えて中興の祖といわれる二十五代式信以降、現在まで連綿と誌されてあり、また絶家となった信淵大人家の虚位も記載され供養を続けている。これが何よりの、佐藤総領家の証左であろう。

佐藤家「総家筋」武右衛門家の過去帳

名実共に佐藤家総本家筋の武右衛門家古過去帳には、九十一の靈魂法名が記されてある。時代別に数えてみるに明治以前75、明治8、大正3、昭和5で圧倒的に近世が多い。

自家の祖霊はもとより、信淵大人家、本来の総領家たる家の法名をも記載し併せて供養している。その実態を、略系図式法名表をもって標示してみよう。(前掲)

右の略系図の名に付記した死没年月日・法名は、佐藤家の過去帳に記載されてあるものを掲げたが、欠けている部分が目につく。また年月日や法名の字などが左の記録にある系図内容に比し、相違する点が間々にみうけられる。

彌高文庫系図(佐藤系譜・佐藤家略譜)

・佐藤氏系図(秋田県立秋田図書館蔵)

・椿園佐藤翁系譜(東山文庫)

・佐藤氏系譜(醉月堂漫録)

・眞崎勇助収集資料

などの系図類は充実しているようである。

さて——この略系図式法名表を一覧するに、まぎれもなく佐藤武右衛門家は、佐藤総家筋を継承した痕跡が明らかに読みとれる。

四代武右衛門のあとは五代石太郎、信太郎・州一と続き、現当主は信義氏である。同家は挙げて中興の祖二十五代式信以来、代々の追善を続けている。

(本所研究調査委員)

佐藤信淵と中山真際

——ある町奉行与力の覚醒

上田 太郎

内閣文庫所蔵本に「真際隨筆」という記録集がある。まだ活字化されていないが、このたび汲古書院から影印本として刊行されたので早速買求めてみた。上、中、下三冊になっている部厚い本を無難作に繰っていると、突然つぎのような記事が目飛び込んだ。

一、十日加藤橋三郎に頼まれ、源右衛門屋の内當番出掛ケ桃井へ遣す。

大木井庵所持造紙形へ画を頼みに大久保一丘を尋、夫より大木井庵、邑上雅昌、佐藤元海翁を訪て夕刻帰る。

「元海翁?」。もしや佐藤信淵のことではあるまいか。内題「丁未雜記九」の「弘化四年丁未十二月朔日起筆、嘉永元年四月二十二日稿脱」と記されている巻である。

急いで次の項を読む。

一、凡西洋諸国の火攻酷烈なりと雖も、弾丸は薄く軽き炮を以発する故、火葉至て弱し。故に大概の桶ならハ打抜程の

事なし。併しながら打放して後、其彈四方へ分裂碎発する時ハ、四方悉く毒火となつて人馬は更木石に至る迄皆焼す。故に夷敵より右等の火炮を發しなハ、益進んで敵に近寄、火炮を敵しく打、弥近寄に至らハ銃刀を以力戦すれハ、敵の火攻を免るる由也。

一、當時本邦火術者の云処、其の火箭ハ三十町より三十余町はたやすく走る。是を一発すれハ、いか成夷敵の軍艦堅固なるも忽ち燃上がるへし。如斯唱ふる人の多し。其火箭は製造手重く、一本の落成する三十日、五十日、或ハ百日にも至る。笑ふべきの甚しき也。凡火銃の大なる物程其中り益荒く、小筒の割にハ中り難し。夷賊の舟を焼打にハ、十町より内にして数十本の火箭を四方より打にあられハ、必勝の理なし。火箭も雜木のなま木を以製法あり。火急の

時は一夜に数百本をも製すへし。三百目位の中筒の火筒は、金一兩に十八本を造り出すへし。六貫、七貫、或八十貫目、其後の大砲と雖も、其費用も多く掛らす、其手間もとれずして製造する法有、と右二条元海翁の話。(句説点は筆者挿入、以下同様。)

これはまさしく佐藤信淵だ。その説、まことに当を得て実際である。たまたま信淵研究家の川越重昌氏にお会いする機会があつて、このことをお伝えすると間もなく、鶴田恵吉氏の「佐藤信淵年譜」を頂戴した。

年譜によると、信淵の最晩年、弘化四年の「師友・門人」欄に、「〇二月十六日友人中山業智信淵を訪ふ。〇同月十七日友人中山業智信淵を訪ふ」とある。信淵が「経済秘書」、「吞海筆基論序」、「權貨法」、「防海余論」、「自走火船法」、「東西火攻辨」を著述した年である。

さらに「真際隨筆」を繰ってみると、「丙午隨筆四」(弘化三年丙午十二月朔日起筆、同四年丁未三月十七日脱稿)に左の如くあるを見た。

一、佐藤元海翁ハ冤罪にて先年

追放命せられし故、予も其後ハ面会を断しが、日光御宮御參詣済の大赦に去年丙午十一月旧罪免されしとて、丁未二月十六日予の家を訪らる。予折節家にあらずして相見さる間、翌十七日翁を尋ねて面会す。今年八十一老、健成事也。

つまり「真際」こと中山業智は、信淵が「吉川源十郎不束一件」に連坐し「江戸私」の処分を蒙った文化十三年以前から知遇を得ていたことになる。

ここで、中山真際という人物の概略に触れてみたい。「大日本人名辞書」を繙くと、

「ナカヤマシンサイ、中山真際。系譜学者。名は業智、通稱弥十郎、一号を琵琶洞と云ふ。江戸町奉行組与力にして歌謡平曲を嗜む。真際雜記七十巻を著す。弘化三年より元治元年

(時に年六十六)に至る十九年間の隨筆なり」とある。つまり「真際」は町奉行の役人であった。「与力」とは、今でいうと差詰め警視庁の課長補佐級か。すでにこの頃は致仕して、養子源右衛門に家督を譲っているが、隨筆文面から察すると北町奉

行所の当番方与力を奉じていたらしい。「当番方」は、捕物出役、処刑執行の検使が主要任務である。したがってその職責上、「予も其後ハ面会を断」っていた理由が肯

かれる。この年、佐藤信淵は「八十一老」と記されているが年譜には七十九歳で、真際は四十九歳、信淵より三十歳年少であった。なお「真際隨筆」は始めの四冊のみで、以後は「真際雜記」と改めているが、影印本では前者を表題としているので、それに随うことにしたい。

さて、佐藤信淵との関係に照準を合わせながらこの「真際隨筆」を第一巻から目を通してみる。

弘化三年正月十五日の大火で被災した真際は、漸く五月二十五日焼野の原の假居に落着いた。今迄書きためた記録はすべて焼失し、改めて八月十四日より筆を起している。趣味の平曲に関する記事や、焼失した記録の備忘を書き連ねた中に混って、

一、二十七日浦賀へ亜米利加ホストン国の軍船二艘着。長四十二間半・巾十三間・七百八人乗、長三十間・巾七間・三百人乗也。川越、忍の人数出張

君候も出馬あり。予思、是も英吉利の軍艦にて、此国の隙を伺ん為に来れるならん。六月七日出帆歸国す。此事六卷目元海翁自走火船

図説に

この記事が現われる。これはこの年閏五月アメリカ東インド艦隊司令官ビッドルが来航し、通商を求めて幕府に拒絶され退去した事件で、時あたかもアヘン戦争で清国が英国に大敗、さらに日本を目ざして西欧の軍船が周辺海域に頻出し始めた頃であった。真際は「余思」として私見を述べているが、モリソン号以来わが国にとって最大の脅威は英国の強硬戦略であったから錯角したのである。記事末尾の「此事六卷目元海翁」云々の個所は後に真際自身が細字で書き加えた備忘である。

そこで真際の指示通り第六冊目の「丁未雜記六」(弘化四年丁未七月二十五日起筆、八月十五日稿成)を開いて見て驚いた。

一、自走火船図説 図略

と題を記して、この冊後半の殆んどを費し、全文を克明に筆写してあるではないか。「自走火船」の内容については、信淵自身がすでに度々詳述しているものと大差はないので、ここでは説明を省く。

しかし、その文末には「弘化四丁未之年六月十二日八十一歳椿園佐藤百祐信淵述」と明記してあるから、これはまさに信淵の最新著述であろう。交際再開後、両者の信頼と親密の度合が急速に深まった証據といえようか。

實際の信淵信奉の姿勢には並ならぬものを感じる。さきの「丙午隨筆四」にはさらに、

一、鉄炮の弾丸鉛子なれハ、年久敷立は中ずの様にて成て、鑄直しても其用をなさず。是ハ鉄つちを以打固め、真にて成て新に鑄直すより外仕方なし。是を閉ふにハ箱中へ泥を入れて、其中へ入置へし。然すれハ数百年を経ると雖も、新に鑄立たるか如し。鉄丸なれハ鉄うるしを塗て、箱中に収置へし。是又数百年を保つ、と佐藤元海翁の語られしを思ひ出候書記。

と、弾丸保存法をメモしたかと思うと、

一、呑海肇記防海餘論

と項を改め、その全文を書写しているのである。信淵のこの論文は、安濃津藩主藤堂高猷侯の需めに応じたものとしてすでに著名なもの

であるが、ここに記載されているものの文末は意外なことに左の如く結ばれている。

本書既に成て為に献せんとす。然るに愚息信昭此を讀て驚き恐れ曰、不肖竊に此書を一覽せしに實に是萬邦を統平し宇内を混同するの秘策にして、八十志翁の壮心感伏に堪たり。然りと雖も（中略）君侯に益なくして徒に多士の嫉ミを受んのみ。且又此書世上に流布する時ハ、或ハ越俎の咎め在んも知へからず。願はくハ固辭して此を献する事勿れ、と書を抱て悲泣す。靜に之を思ふに豚犬か言も又一理無に非ず。因て此書を焼捨て、安濃津侯の請を辞す。

弘化四丁未之正月六日椿園佐藤百祐信淵識。

これはまたどうしたことであろうか。公表を憚り焼却処理される筈の上書が、そのまま實際の手によって書留められているのである。この点は研究家の御教示を待つとして、信淵が實際をいかに信頼していたか、という証左にあげることはできよう。

嘉永三年、わが国の周辺海域は外国船の近接出没が頻りとなり、

国内の緊張度が日毎に増大する。幕府は打払令復活を予告して諸大名に防備の強化を命じ、四民に海防への協力を要請した。そして、幕府へは各方面から海防の意見書が寄せられ始めたという。そのような情勢下、ついに信淵はこの世を去った。

實際は「己酉雜記十二」（「嘉永二年己酉十二月二十四日発筆、同三年庚戌五月十四日稿成」）に、簡潔ながらつき如く記録している。

一、嘉永三年庚戌正月六日卯中刻医家佐藤元海椿園翁歿、年八十四、出羽秋田人。此翁諸家の学に通じ、別て兵家の書に精く、炮技を能す。外寇防禦の事を説る著書数十種有。皆実用の書也。

一、椿園翁明和六年己丑に生れ、今年八十二にして歿。曹洞流浅草八軒寺街松応寺に葬。

法諱、真武院賢剛徳裕居士。

やはり實際は信淵の年齢を正確に把握していた。いかにも町奉行と力らしい。しかし、普段は信淵のいう齡を素直に受け入れることによって、ひたすら尊敬の念に徹していた、と理解したい。

再開から没するまでの九三年間、實際はこの僅かな歳月に佐藤信淵

から数多くの知識を学んだ。そして眼を覚まされた。

一、清朝と倭夷と交破れて、一昨乙未の年より年々夏秋の間戦争有、と佐藤元海の話。

（丁未雜記七）

これは弘化四年の記録だから、一昨年ならば乙巳で弘化二年、乙未とすると天保六年である。アヘン戦争は天保十年（己亥）から同十三年（壬寅）だからちよつと理解に苦しむが、いずれにせよ、英国によるアヘン戦争が一連の侵略戦争を指すのであろう。

一、凡戦場にて数百人立列り箭を放たんに、羽を付け根を堅めし矢は失費多くして無益也。唯矢の長に竹を切て頻りに雨の降如くに射れハ、敵手足を動かすに閑なし。増て大小の砲に彈藥を籠へき閑有んや。然して散々に射しらまして能図を考へ一斉に長槍を入れハ、数万の敵たり共敗せずと云事無。是弓家乱箭の秘事也、と小笠原長春の話。

と友人の弓術家から聞けば、即座に

一、實際案に、佐藤元海が行軍炮の五百目成に一匁つゝの切弾を数千装て打放する利害も、

前の乱箭と同事なり。(同七)
と信淵直伝の戦術論をもって応ずる具合である。国際情勢や戦術戦略等、信淵の影響は甚だ大きい。

佐藤信淵翁の実蹟

平沢 四子男

自号「貞際」は「真如実際」の意なりという。隠居の身とはいえ武士の魂は生きていた。最晩年狂気の如く警世の書を書いた信淵の熱気に触れて、中山貞際もついに真の現実を知るに至った。かくして身辺の些事を超脱、広い視野での国家情報佐藤信淵なき後も筆まめに書き綴っていく。その集大成が「貞際隨筆」全七十巻なのである。

(平成二年一月十五日記)

(近世文書、地方史研究家。東京都

中野区江古田四ノ四二ノ一四住)

佐藤信淵翁は幕末の秋田が誇る偉大な学者、実行家として私は尊敬しているが、一部の識者に時代の相違その他のことで誤解されている面のあることは誠に遺憾のことである。翁は学者としては異常な程行動力があつたために疑問視されたり、畸人と見られることもあつたろう。私は実蹟面から調べて見ようと考えた。

千葉県東金市の市史編さん室の紫田武雄氏はこうのべている。

信淵翁は寛政四年(一九七二)一宮藩(千葉県)加納遠江守久周に仕えた。先に津山藩(岡山県)の採用を断わった翁がわずか一万三千石の加納家に何故仕えたかである。加納久周は幕府の若年寄を勤めた人で、老中松平定信、若年寄本多忠等とともに有力者であつたからだろう。信淵はそのとき目を患っていた。自分で治療しながら君公の所有する地引網の運用にあたっていた。藩内で農民一揆が起りそうになったとき、藩主の内

命を受けて、未然に防止した。そのことは翁の名をあげ、藩主、農民を喜ばせたが、裏では重臣達から白い目で見られた。翁二十四才のことである。津山藩に仕えなかったことも同じことだった。このことがあつた翌年には辞退して江戸に帰った。

二十六才のとき浅草の口音院の娘と結婚したので、郷里の母を呼び寄せた。寺の住職は「信淵は畸人だから嫁にくれる」と言っている。翁は有名な孝行人で、津山を辞退して郷里に帰るとき、津山侯は銭別として百兩を下賜した。翁は三十兩を母に贈ろうとしたが、お前の学資金として預っておくと言つて受取らなかつた。親戚や知人で貧乏な人々に米一俵づつ与えたと言う。母が六十二才で死んだ。翁のなげき悲しみは普通ではなかつた。「骨立」する程やせたので、妻や知人が心配したので九十九里浜へ転地保養することにした。

千葉の大豆谷村の庄屋で豪農で

あつた白井忠義は翁の門人であつた。九州島原から取寄せた煙草の種を植えさせて見たところ、国分(鹿児島)のものに劣らないものが出来たと言う。諸国の陸稲種十七種も作らせている。

ここで土地と家をもとめて医業も開き農業の実権もすることにした。この屋敷には蛇が多く借家する人はいなかつたが翁は平気で住んだばかりでなく、蛇を取つて喰うので、次第に蛇はいなくなつた。変人と言われるに十分である。近所に老松の太木があつて、根元は空洞で、数人がはいれたと言う。翁が万松斎、又松庵を号したゆえんであろう。

次郎物語を書いた作家の下村湖人氏は大豆谷村での信淵翁は、甲州ぶどうを作り、椎茸の研究、米、蔬菜の栽培を教え漆樹なども奨励した。蠟を取る外にその粕から馬の栄養素も作っている。近いところにある、小金原は鎌倉時代に名馬を出したところで、徳川幕府の牧場であつた。そこに大きな沼があり、乗馬で渡することは難中難であつたが、翁はこれを持ち切る術を知つていた。牧士も教えられて乗り切つたと言う。幕府の中山信濃守もこれに挑戦して見たが三

十米位で人馬ともに沈んで身動きが出来なかったとある。信濃守は旗本の中でも名高い馬術の人だった。

九十九里町の鈴木教育長はこんな話を知らせてくれた。翁の父信季も三年もいたところである。今農村部で造園用の「楨」づくりが盛んで、農民のよき副業として喜ばれている。これは信淵翁が教えたものである。

信淵研究家の鍋田恵吉氏は、翁は、房総産業の恩人である。東金市で小児薬「一角丸」をつくり、越前よりまくわ瓜の種を取り寄せたり、甘藷なども奨励したと書いている。

東金市台方一丁目佐藤信淵先生家大成之地という碑が建立されている。

阿波人物志(徳島県)によれば、文化四年(一八〇七)に阿波藩の中老、集堂勇左衛門惟寅の推薦で、信淵翁は兵学師範として阿波藩に出仕し、2年勤めたとある。ロシアの船が千島、樺太(サハリン)に出没はじめた頃だ。その頃翁は、大豆谷村から江戸に帰り、京橋柳町の地主鹿島清兵エの世話で医業を開業し、多忙だった。人体解剖術「本朝人体術」の大家とい

われた熊田大炊介から医学を学んだ頃だろう。友人箕浦次市左エ門の紹介で、集堂勇左エ門を知った。集堂は病氣治療ということと翁としばしば会見し、人物を見抜いて阿波藩に招くことになったものである。文化5年(一八〇八)三月

に集堂と同道で赴任し、月十両を下賜された。海防策、鉄砲窮理論三銃用法などを著し、大砲を製造し、自走火船の実験もした。三銃とは行軍砲、要塞砲、軍艦砲のことである。これ等の射程距離はせいぜい六百米位だったろう。自走火船とは船尾に火筒があり、それに火をつけると前進し、敵船にあたり、火災を起こす仕掛けのものである。しかしこの火船の完成後集堂は何故か登城を止められて、まもなく江戸詰となり死亡した。

幕府でも文化六年にこの自走火船に注目し、翁を呼んで、鉄砲組頭井上左太夫に見学させたという。又長崎奉行土屋紀伊守も翁を呼ぼうとしたが断わっている。

その後の集堂家は四代五代と続いているが嘉永年間の集堂小平太は五百石で江戸御留守居役を勤めている。

久保田藩と信淵翁の関係はどうか。翁は文化七年(一八一〇)江

戸久保田屋敷に招かれて、財政たて直しの意見をのべている。しかし一年たってもまとまらないので翌年八月九日に大豆谷村へ帰った。ところが九月に飛脚便でもう一度来る様に通知があった。家族は反対だったが再び久保田屋敷へ出た。

松尾佐助と言う者が藩の熊谷惣助に取り入って翁の意見に反対しているの重役達がきめかねていたのである。これを見た翁は憤然として帰り、家老足田松塘に激文の建白書を送った。文化九年元日のことである。これを昭和十三年に東北振興会が、秋田藩史として出版し全文をのせている。簡単に言えば藩の財政立直しには、千石船百艘をつくれ、江戸の豪商十人をして秋田に支店を出させる、生産の振興をはかり生活用品の輸入を制限する、藩も住民も徹底的に儉約をすると言うのであった。

もしもこれをやれない様だったら先ず信淵の首を切って家老も責任を取れ、家老と信淵の格式の差は大きいと藩や住民を思うことでは譲らないと言うものである。この自信と熱意には全く頭の下るのを覚えるものである。

天明三年(一七八三)にも翁の父信季が久保田藩にエソ地開発、

沿岸防備について建白したがそれを用いようとしなければかりでなく、藩政を批判するものとして逮捕されようとしたことがあった。それを今彷彿と見る様な気がしてならない。

こんなことがあってから翁と秋田とは無縁であったかの如く思われているかも知れないが私はそうは思わない。明治維新のとき久保田に、山中新十郎と言う大実業家が出現した。平田篤胤、佐藤信淵の両大人を非常に尊敬していた。とくに経済の面では信淵翁の方策を学んだものと私は考える。当時の久保田藩は他藩に劣らぬ借財国で、数十万両があった。住民も飢饉で悩み苦しんでいたときである。山中は藩に産業を起し輸入を抑制する様に建白し、いわゆる山新木綿、秋田うね織、黄八丈、たばこなどを生産させた。維新戦争に際しては那波三郎右衛門と共同で、鉄砲、弾薬等を購入して藩に寄付し、官軍の戦を有利にした功績は誠に大きいものがあつた。この山中の経済行為は信淵翁の考えと全く同じであると私は考えるのである。

江戸湾並に印旛沼開拓について

のべて見る。信淵翁が文化十三年

(一八二六) 吉川神道熟の建築にあたり幕府の許可を得ないで寄付金を集めた責任で追放されて、船橋にいたことがある。文政七年(一八二四)頃である。江戸湾岸約二十里を干拓しようとして調査をした。又印旛沼の干拓もしようと考えていた。それから二十年後の天保十四年に幕府が五十万両の予算で印旛沼の堀割工事を沼津、庄内など五藩に命じた。しかし経験者がいなかったために工事が進まなかった。沼津藩の重役で翁の門人である、石川治兵衛が心配のあまり、翁に手紙をやり教をどうした。翁は七十五才の高齢であり、しかも病中だったので門人の小島百之を派遣して見させたが工事の経験者がいなかったため、翁は沼津侯に意見書を書いて届けさせた。その内容は驚く程すぐれたものだったと言うが洪水等があった中止となっている。そのときの翁の歌に

逃水のにげかくれても

国を思う

世の追放者をあわれとも見よとある。鹿手袋村(浦和市)に蟄居していた時である。長男の昇庵や門人達に、こういう意義ある事業を成功させる様に努力するのが国恩に報ずる道だと教えている。

京都綾部市の市史「丹波巡察記」によれば、九代藩主九鬼隆都(たかむら)は藩創改革のため農学の大家佐藤信淵を招聘したとある。翁七十二才のときで、江戸のかくれ家にいた。天保十一年(一八四〇)四月二十九日に綾部に行き、領内七郷を巡視して同年七月に藩主に提言したのが巡察記三巻である。

綾部、川合などの五郷の面積、石高、家別物産、農作の状況や農民生活などを調べて書いたものである。領民に一日一銭の積立をすすめて凶作や不幸のときの社会をつくらせたりした。

下村湖人氏によれば天保十一年三月四日に信淵翁は宇和島(四国)の伊達侯の息子と一所に九鬼侯の江戸屋敷に行った。そのとき九鬼侯は「一度綾部を見てもらいたい。農村でやることがあったら一さい任せるから思うままにあらためて欲しいと言ったという。その頃の綾部の農村では綿、たばこなどに虫がついて困っていたのでその駆除法なども教えた。このとき翁は高令になっていたので四男の祐三を同行している。

この九鬼隆都は明治維新のとき、江戸城明け渡しに際し、兵火から

無事にのきがれさせた大きな働きをした人でもある。

宇和島(愛媛県)文化財保護審議会が編集した「宇和島の自然と文化」の中に伊達宗紀のことがある。宗紀は春山と号し宇和島藩七代の藩主で、幕末の名君の一人で、九十八才の長寿を全うした人である。寛政四年(一七九二)宇和島に生れ、明治二十二年逝去するまで藩を守り近代の基礎をつくり、人材を養成した功労は大きなものがある。

藩士小池九蔵、若松惣兵衛をして、佐藤信淵の経済を学ばせ、これを応用し、融通会所を開設し、商業の繁栄と統制をはかり、また物価対策をたてた。

宗紀は文政八年(一八二六)から五年間倭約、文政十二年には大阪商人からの負債を無利息二百年賦償還、検地の実施による農村再建、とくに文政八年は木蠟専売を實施し、引退時には六万両を蓄積していた。信淵の導人は産業開発に役立ち、小池は農業技術、若松は農政面で活躍した。

『愛媛県史(近世下巻)』に、佐藤信淵が津山藩(岡山)の藩政改革について、藩主の諮問に答え、十六年間で十七万両の蓄積をしたとい

うことがある。又幕府の天保改革の時、諮問をうけた程の人物であると書いている。宗紀、宗城がかねてから依頼していた、答弁書を早く出す様にとの催促状を持って、小池九蔵が訪問している。その時十両を下賜している。天保十年九月には「弊政改革秘話」同年十月には「宇和島世子封事」を書いて提出した。九代の宗徳のときである。前書には改革前後の状況を、後書には殖産興業、物資の流通と統制及経済のことを書いてあるという。しかし宗紀の時代にはまだその効果を認めることは出来ないが信淵の草木六部耕種法や清良記には若松惣兵衛の農政改革の中に生かされているとある。

調べているうちに宗紀の三子宗徳は九代藩主となり、久保田藩主佐竹義厚の娘佳子と結婚していることを知った。宗徳は幕末に仙台伊達藩の動向や藩籍奉還のことで苦労されている。

信淵翁の実蹟調査で、最初に照会したのは岡山県津山市博物館であった。後で書くがここが翁の出発点と言えるところだからである。非常に期待していたが何ひとつ資料がないとのことだったがっかりした。しかしよく考えて見るに、翁が如

何に秀才であったとは言え、漸く二十才の若年であり、まだ有名な学者でもなかったろうし、加えて津山藩の宿老達の嫉視も甚しかった様だから業蹟として書き残す筈がないと考えた。幸にも宇和島藩の資料の中に津山藩に於ける翁の活躍を見ることが出来て嬉しく思っている。

下村湖人氏はこう書いている。信淵翁は父につれられて江戸に出て、知人の三原金太夫を訪れた。三原は津山藩の中老であった。藩医の宇田川槐園を紹介してくれた。それから二人は足尾銅山に行くがまもなく父が死んだので遺言によって宇田川塾に入門した。天明四年(一七八四)十月で翁十六才のときである。ここで医学、動植物、天文地理、歴史、測量、数学等を勉強した。

翌年師の槐園とともに、藥草研究のために美作(岡山県)へ行く。次年には薩摩に行き、帰りに信州を経て江戸へ来て、三原金太夫宅に厄介になる。三原は翁の非凡を見て津山侯松平康哉に推薦した。松平侯もかねてから宇田川槐園から聞いていたのでいつか呼んで見ようと考えていた。たまたま侯が病氣になった折に、三原と相談し

て呼ぶことにした。年も若いし、まだ学者として有名でもなかったから、周囲に遠慮して、講談師として招くこととした。松平侯は非常に気に入る、しばしば呼んだ。はじめは講談だったが次第に政治向きになり「政治の根本は自分を治めること」と申上げた。侯もうなずかれて盃を賜わったと言う。藩で百石で召し抱えようとしたが翁は敢へてこれを受けなかった。反対者がいることが分ったからである。銭別百両を頂いたのはこのときである。高田の下郎で送別の宴まで開いてくれたと言う。

鹿兒島出身で、東京在住の隨筆家寺島鉄秋氏が郷土誌「さんぎし」に次の様なことを書いています。藩の財政改革の実施は天保二年から開始され、嘉永元年に調所笑左エ門七十三才のとき、琉球密貿易の件が露顕して幕府の忌諱に触れ江戸で自殺するまでの二十年間、身命を抛って起死回生の努力を重ねた。なる程調所笑左エ門の偉大な功績や、奴隸の如き忍順と犠牲を強いられた、大島郡民の縁の下での力持的な役割も当然高く評価されねばならないが、薩摩天保の財政改革の根本となったものは実に幕末の農学研究の大家であった佐

藤信淵先生の『薩摩経緯記』であった。先生が薩摩内を二度ほど視察され、地方地方の特色を具体的に述べておられるのには一驚を喫する。文政末の借金は五百万両にも達し、参勤交代の費用もなく、江戸邸勤務者の給料は十三ヶ月も滞り、邸内の掃除費すらもない状態だったがこの五百万両を支払い百万両を残したのである。

寺島氏が薩摩が明治維新のときの原動力となり得たのもむべなるかなと書いている。やがて同藩の大久保利通が明治政府の枢機につくが、翁の政策に注目したことが岩波書店発行の『日本思想大系・佐藤信淵』に書かれている。

昭和六十三年の『浦和市史』に佐藤信淵は宮崎安貞、大蔵永常等とともに、江戸の三代農学者と言われた人である。天保三年に翁は幕府より追放されて、鹿手袋村(浦和市)の永堀惣助方に逃れた。惣助の父當五郎は書道、文学を好み江戸の学者文人と交遊があったから喜んで翁を迎えたものだろう。同家の土蔵の二階を借りて著述をしながら惣助に、土性学、作物、肥料などのことを教え、近所の百姓を通して農作の実験をした。短冊型の苗代などもつくっている。

鹿手袋村の地質は悪く、全村の米収は四百俵位しかなかったが翁の指導で八百俵位となり村人から感謝されたところ。鶴喰いという稲種を、門人の伊豆亜山代官江川太郎左エ門にすすめたが収量が少ないと言って断ったので鹿手袋村の藤五郎と相談して植えさせたものである。三、四年たったらどの稲よりも収量があったと言う。

又藍、菜種、桑の栽培、藍色の製法及貯蔵のこと迄教えている。

地質調査と言っても、今と違って試験管も薬品もない時代だから、目で見る、鼻で嗅ぐ、口でくさき、なめて見るより外に方法がなかった。村野人達は土喰いちいさんと言っていたという。

天保十年に幕府は蘭学者の渡辺華山、高野長英等を逮捕した。華山は『懐機論』長英は『夢物語』信淵翁は『夢物語』を書いて幕府を諷刺したためである。信淵翁は門人の塩谷石陰の急報で江戸のかくれ家から鹿手袋へ逃げたので難を免れたが五十七日もかかっている。塩谷石陰は老中水野忠邦の侍講である。翁の七十一才のときである。

以上のほか、天保元年(一八三〇)には久留米藩(佐賀県)家臣

本荘一郎に出入し筑後川改修について献策をした。

同八年には田原藩(愛知県)の渡辺華山の依頼で領内を巡視し農事の講習をした。

同九年には沼津藩(静岡県)の老臣土方縫殿介の依頼で四男祐三を同伴して伊豆、駿河、三河を巡視した。前に書いた、天保十四年の印旛沼の堀割工事のとき藩主より意見を求められたのもこの縁故があったからだろう。

津藩(三重県)藤堂和泉守からたびたび招かれた。けちん坊であったなどの話もある。天保十四年三月老中水野忠邦のときに、幕府は信濃翁の身もと調査をしている。担当は鳥居耀蔵である。老中の真田幸貫は「信濃は国防論なども考えている者だから江戸に入ること

を許しても良いだろう」という意見だった。老中筆頭の水野は信濃翁をして「復古法概言」を提出させている位だからもちろん異議がないが鳥居耀蔵の強い反対で許されなかった。しかしその頃門人、知人達から赦免運動が起り、弘化三年に前將軍家斉の法要に際して大赦があり、翌年から江戸にはいることが出来て一家まとまり住むこととなったのである。(秋田市住)

研究所記事

- * 01・05・01 研究所報第四号発刊
- * 01・06・27 第11回調査委員会
- * 第1回秋田近代国学調査会打合せ会議 彌高神社斎館
- * 01・08・08 第12回調査委員会
- * 01・09・10・01・11・05 秋田の先人平田篤胤大人展 秋田市立赤れんが郷土館共催
- * 01・10・01 第4回学術文化講演会「銭沓大嘗祭をめぐって」國學院大學助教阪本是丸講師 彌高会館
- * 02・03・28 第13回調査委員会
- * 02・08・01・09 佐藤信淵大人没後一四〇年特別展示 彌高神社斎館特別展示場

研究活動

- * 講演「平田篤胤の世界(上)」—平田古道と現代—齊藤壽胤 01・09・16 秋田市立赤れんが郷土館
- * 講演「平田篤胤の世界(下)」—平田篤胤と秋田—齊藤壽胤 01・09・23 秋田市立赤れんが郷土館
- * 講演「佐藤信淵の思想と学問」川越重昌 01・10・07 秋田市立赤れんが郷土館
- * 講演「歌われたる平田篤胤」秋田県民歌他をめぐって—齊藤壽胤 01・10・01 第4回学術文化講演会 彌高会館
- * 「先人としての篤胤」—平田篤胤

大人展」に寄せて—齊藤壽胤稿 01・10・27 週刊アキタ

* 学習講座「短冊を読もう会」齊藤壽胤 01・11・02 秋田市立赤れんが郷土館

* 「平田篤胤の和文体の思考」—平田篤胤「書簡」「和魂漢才」解説—齊藤壽胤稿「側面から見た平田篤胤と後室の親元山崎家について」桐原善雄稿「佐藤信淵の著書は現在何処に蔵されているだろうか」川越重昌稿 01・05・01 「研究所報」第4号所収

* 研究講話「佐藤信淵の子供観」齊藤壽胤 01・07・17 佐藤信淵大人生涯祭 彌高神社斎館

* 「佐藤信淵」時代を先取りした経世家「—平田篤胤—平田國学を樹立する」齊藤壽胤稿 01・07・25

* 「人づくり風土記(5)ふるさとの人と知恵秋田」所収

* 講話「平田篤胤の和歌にみられる人情観」佐々木栄孝 01・08・24 平田篤胤大人墓前生誕祭 大沢公民館

* 「平田篤胤大人展図録」01・12・25 秋田市立赤れんが郷土館・当研究所共編発行

* 講演「佐藤信淵大人のあとかた」齊藤壽胤 07・01・29 明徳地区寿会 秋田市東部公民館共催 彌高神社斎館

* 文化講演「佐藤信淵—その生涯から学ぶもの」川越重昌 02・02・27 羽後町教育委員会 同町多目的研究施設

* 講話「建学の精神としての佐藤信淵考」齊藤壽胤 02・04・20 秋田経済法科大学建学の精神検討委員会

* 講話「平田篤胤と佐藤信淵について」川越重昌 02・05・02 彌高神社例祭

人事

佐々木栄孝 研究調査委員(新任)

02・04・01 桐原善雄 研究調査委員(辞任)

02・06・30 齊藤壽胤 学校法人秋田経済法科大学建学の精神検討委員会委員(委嘱)

02・05・17 新収資料

* 平田篤胤父子画「和歌賛」高橋萬年筆 軸装

* 鐵胤夫人鐵瀨短冊

* 吉川忠行短冊

* 川越重昌研究調査委員寄贈資料

総点数 一六三

平田篤胤大人展開催

秋田市立赤れんが郷土館にて平成元年九月十日〜十一月五日まで開催された。この展示は当研究所主催展示の第十回目として、また秋田市政百周年記念事業の一つとして、同赤れんが郷土館と共催による開催となった。肖像画、自筆本、書簡、遺品装束類、墨蹟類など総点数一五〇点以上展示された。